

終末前主日 説教 「天地創造の時から」 要旨

牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2022年11月13日

マタイによる福音書 13 : 24-35

天の御国の奥義を伝えるため、イエス様は種をまく人のたとえに続いて、新たに三つの譬えをお話しになりました。そこで、先ず仰ったことが毒麦の譬えです。そして、次に仰ったことが、からし種の譬えとパン種の譬えでありました。そこで、それぞれを通し教えられることは、天の御国の訪れを待ち望む私たちの信仰の姿勢です。それは、カラシ種とパン種の譬えが示すように、天の御国は希望をもって待ち望むものであり、私たち信仰の姿勢はすべてここにかかるものだからです。再来週には、アドヴェントを迎え、教会暦では間もなく1年が終わろうとしています。私たちが一つの終わりを新たな希望の中に迎えることができるのは、その先にイエス様というこの大きな恵みを見つめているからです。カラシ種とパン種の譬えは、この恵みの大きさを私たちに改めて教えてくれているように思いますが、ただだから、御言葉も、将来を希望の中に待ち望む私たちの信仰を次のように語るのです。

「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。」とヘブライ人への手紙11章1節ではこう語られているのですが、ただだから、パウロもこの希望についてはこう語るのです。「見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか」と、パウロがこう語っているように、今ははっきりと分からなくても、いずれ必ず私たちにははっきりと知らされる時が来るのです。そして、その時ははっきりと知らされるものが神様の御心でもありますが、終わりの日、私たちがそれを知るのは、イエス様のその姿をその目で見て、神様のその大きさを肌で感じて、これまでのすべてのことがそのままその心にストンと落ちることになるからです。それが天の御国の訪れというものでもありますが、ですから、私たちが抱く希望は決して絵空事で

はありません。日々希望の中に過ごすということはつまり、先ほどのヘブライ人への手紙の御言葉が語るように、将来がいかに可能性に満ち、いかに信頼できるかを我が身をもって明らかにすることだからです。

信仰者の現実

ただし、それが絵空事ではなく、必ず実現することであっても、それを信じ信頼し続けることは容易なことではありません。カラシ種とパン種の譬えが語るように、結論から申せば、全幅の信頼をもってその日を待ち望めばいいだけの話ではありませんが、しかし、毒麦の譬えが語るように、それは同時に、私たちを危うさの中に突き落とすものでもあるからです。なぜなら、イエス様が、終わりの日までそのまま何もせず、放っておくようにと仰るように、何も変わらないままであることに私たちは耐え難い気持ちにさせられるからです。そして、それは、私たちには、畑に蒔かれた種の良し悪しを見定める力がないからだ。イエス様は仰るのですが、従って、良いものも悪いものも渾然一体となってその日を待ち望まなければならないのが私たちであるということです。そして、このようにイエス様が天の御国の期待値の高さを語ると同時に、私たちの足下に置かれたその危うさについて語るのには、それが私たちの信仰の現実でもあるからです。

ですから、この毒麦の譬えには、二つの意味があるように思います。一つには、自らの力に依り頼むことの愚かさです。そして、もう一つはイエス様の愛の深さです。その愛の深さゆえに手出しはするなと仰っているからです。ですから、それはまるでエデンの園にいたアダムとエバに向かって、神様が善悪の知識の実からは決して食べてはならないと仰ったことと、それと同じことをイエス様が仰っているということでもあります。では、イエス様は一体何

を案じて余計なことはしなさんなよ、とこう仰るのか。

25 節には「人々が眠っている間に、敵が来て、麦の中に毒麦を蒔いていった」とあるのですが、深い眠りにつき、私たちがまったく無防備の状態にある時、そこに近づいてくるものとは一体なんでしょうか。それは、私たちが深い眠りについていてるわけですから、そこでうごめいているものは人間以外のものです。それをイエス様はここでは敵と呼んでいるのですが、敵とはつまり、私たちが安息の状態から引き離す悪しき力、つまりは悪魔ということです。従って、そういうものにムキになって立ち向かったところで、端から私たちに勝ち目はありません。だから、馬鹿なまねはよせと、こう仰るわけですが、ただ、だから、イエス様は、私がなんとかするからとは仰らずに、そのまま放っておけとだけ仰るのです。ですから、このことは、私たちが耐え難い気持ちにさせます。それは、信仰の眼差しをもってまっすぐに足下を見れば見るほど、私たちは何が何だか分からなくなるからです。しかも、それが一向に改善されぬまま終わりの日を迎えなければならぬというわけですから、これは、想像するだけでもなかなか辛いところがあるように思うのです。

しかし、辛かろうが何であろうが、それが私たちの置かれた現実です。従って、それに耐え続けるのが私たちの使命であるとしたなら、そこにしっかりと立ち続けるのが私たちの信仰ということにもなるのでしょう。そして、私たちがそういうよく分からない中途半端な状態に立ちづけるのは、悪魔が色濃く働いているところには、神様もまた色濃く働らいておられるからです。

ただ、耐えると言いましても、そもそものところで言えば、何が良くて何が悪いかさえもよく分からないわけですからどうしようもありません。悪魔が付け入るのはそれゆえのことでもありますが、その付け入り方は、イエス様に対する荒野での悪魔の誘惑の出来事が示すように、悪魔のすることは、私たちに対して牙をむき、襲いかか

り、震え上がらせるばかりではありません。その反対に、私たちの気を引き、気持ちよくさせ、いつの間にか神様から遠いところに連れて行こうとする、それが悪魔というものでもあるのです。ですから、毒麦の譬えを持って知らされていることは悪魔の巧妙な姿です。終わりを迎えたその時にならないと、すべてのことははっきりしないとイエス様は仰るわけですが、このことはつまり、悪魔のこのやり方をイエス様が認めているということです。ですから、私たちが徒手空拳の勢いで力んで何かをしようとしたとしても、イエス様もまたその力量を認めているわけですから、結果は自ずと知れているということです。

このように、私たちには分からなくても、良い種が蒔かれたところには、間違いなくそこには悪魔がいるわけで、ですから、そういう意味で私たちの信仰生活というものは、とてもきわどいものだとも言えるのです。ただし、このきわどさは、悪魔との戦いの激しさを意味するものではありません。分からないまま付き合い続けなければならないところでのきわどさであり、また、分からないからこそ、その悪魔のことを何とか見つけ出そうとして、間違った判断をしてしまうところでのきわどさです。ですから、きわどさとはそういう面倒くささを意味するものでもあるのです。それゆえ、この悪魔については決して侮ることはできません。けれども、侮ってはいないからこそ、そこで私たちは、時折耳にする「あっ悪魔だ」との声に引きづられることにもなるのです。幽霊の正体見たり枯れ尾花と言われるように、私たちが人のそうした声に振り回されたりするのはそのためです。けれども、悪魔が私たちの手に負えるものであれば、イエス様はここでこのようなことを端から仰ることはありません。できないことは初めから分かっていることだからです。ですから、そうした決めつけるような声を聞くようなことがあっても、私たちは耳を貸す必要はまったくありません。また、そう主張する人たちのことを否定的に捉える必要もありません。端から分

からないことを分かったように語ることは間違っていることであり、それが間違いであることは、私たちにははっきり分かっているわけですから、慌てず焦らずにそういう者とは距離を取るか、その場から離れればいいだけのことだからです。

不確実な中で

それよりも、問題は、いるんだかいらないんだか、それすらも分からない、でも、確実にいる、このところで感じさせられる気持ちの悪さです。しかも、それが私たちがこうして集められている教会の中で起こっているわけですから余計にそう思うわけです。そのため、誰もが思うことは、この状態をなんとかしたいということです。けれども、それがどうにもならない。ただし、そこで私たちが忘れてはならないことは、主の教会の中にそういうことがあっても、これまで主の教会が悪魔色一色に染め上げられることはなかったということです。それは、悪魔が色濃く働いているところには、神様も色濃く働かれていますからでもあります。ただ、この矛盾こそが地上の教会を神の教会として特徴づけることにもなったのです。ですから、そういう意味で、イエス様が「思い煩うな」と仰っていることは「なるほどそうか」とも思うのです。なぜなら、そのままにしておくようにイエス様が仰っているのは、このどっちつかずの状態を悩ましく思う必要はない、ということでもあるからです。

教会の歴史を振り返れば分かることではありますが、教会に悪い力が働いているのはイエス様が仰るように間違いありません。けれども、神様の大きな恵みはそこに置かれたものでもあるのです。つまりは、よしんば悪魔によって教会が知らず知らずのうちに大きな痛手を被ることがあったとしても、それを上回る恵みをいただいてきたのが地上の教会であったということです。ですから、そういう意味で、私たちが信仰の眼差しをもってまっすぐにその足下を見つめるということは、そこで私たちがその時何を見つめているのか、この点が私

たちに問われているということです。そして、それは、具体的に私たちが何を見ているかということではなく、何が何だかよく分からない中で働いている神様の確かさ、これを私たちが見て、聞いて、感じているのかということです。このことはつまり、私たちが見つめるべきは、その確かな神の御心であって、それ以外の不確実なものではないということです。ただ、どうしても私たちのその目に飛び込んでしまうのがこの不確実なものでもあるのです。

そこで、この不確実なものへの対処方法として、ユダヤの人々の中で大きな位置を占めることになったのが律法主義、ファリサイ主義でもありました。それは、そうした宗教的努力によって、彼らがこの不確実なものを取り除けると思ったからです。しかし、彼らのそうした試みは、状況を返って悪くするだけでことごとく失敗に終わることにもなったのです。なぜなら、そうした宗教的努力は誰も幸せにすることはないからです。それゆえ、私たちは、この毒麦の譬えが示すようにそういう立場を取りません。しかし、だからといって、私たちは何もせずに終わりの日を漫然と待ち望んでいるわけではありません。私たちもまたこの不確実なものと同じ向き合いながらその日を待ち望んでいるわけですが、それが今申しましたように神様の御心を一直線に見つめるということです。では、それはどういうことなのでしょう。その答えは、もう少し先に記されていることではありますが、イエス様と律法学者とのやり取りの中で明らかにされていることです。

神様の愛の中で

一人の律法学者がイエス様を試みようとして「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか」とこう尋ねたところ、そこでイエス様の仰ったことが皆さんよくご存知の「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。そして、同じように隣人をも愛しなさい」というこの一言でありました。ただし、そこで言われていることは、いわゆる

「ねばならない」ということではありません。愛という自らのその行為に拘ることをイエス様は問題にしているわけではないからです。イエス様が仰る愛というものを私たちがどのように学び、我がものとしているのか、問われているのはこの「どのように」ということでもあるからです。そして、私たちはそれを独学で、あるいは、学校のようなところで強制的に教え込まれたわけではありません。神様との関わりを通して、イエス様をまねて、イエス様のお言葉を大事にする中で、つまりは、私たちに向けられた神様とイエス様のその思いの一つ一つを聞いていく中で、少しずつ身に備わっていったものが、イエス様が仰る愛というものでもあるのです。

それゆえ、この愛は人と人とを支配関係に置き、力尽くで物事を整えようとは思いません。それは、神様が私たちに見栄えの良さを求められてはおられないからです。洗練され、整った、そういう見栄えのいいものを神様は求めるのではなく、矛盾を矛盾としてそのまま受け入れる中で現されるもの、それが愛というものでもあるからです。それは、矛盾を矛盾とも感じないようなこの未熟さを大事にされているのが私たちの神様であるからです。だから、イエス様も「幼子のように」と仰っているわけですが、ですから、矛盾に満ちあふれ、手に負えないと感じる幼子のような存在を、私たちは毒麦と決めつけ、取り除こうとは思いません。それは、そうした思い込みや決めつけが私たちの中から失われたからではありません。普通であること、当たり前なこと、変わらないこと、難なく続けられること、これらのことをどうしても求めたくなるのが私たちであるからです。そして、それは、私たちの置かれた現実がそれだけ不確実で、常に危うさを兼ね備えているものでもあるからです。しかし、この私たちにとってのこの普通のことを神様は望んではおりませんし、イエス様もまたそれを喜ばれることはないのです。

天の国の扉はどのような人々に対し開かれているものなのでしょうか。それは、神

様に愛されている人々、神様との愛の交わりに生きる人々、これらの人々に対し開かれているものが天の御国の扉です。この三つの譬えはそのことを私たちに教えてくれているわけですが、ならば、私たちの信仰の姿勢としてそこで求められているものは何なのか。それは、ただただ神様とイエス様との愛ある交わりの中にその身を置き、最後まで歩み続けること、これに尽きると言えるのでしょうか。そして、それができるのは、私たちが物事をすべて完全に何から何まで分かっているからではありません。信仰は分からなくなることがあるし、だから、分かる必要もあるのですが、ただ、分かったと思った次の瞬間には、また分からないとの思いに駆られるものでもあるのです。では、その時私たちはどうすればいいのか、それは、自分で決めずに、すべてを神様に決めていただくということです。そして、決めていただくために何が必要かといえば、危なっかしい不確実なものに頼るのではなく、私たちが今こうして経験している確実なものに任せようとするのです。私たちは、自信が持てなくなるし、分からなくなることもあるのです。この自らの罪におののく私たちに我が身を差し出されたのがイエス様でもありました。この後私たちが与る聖餐はイエス様のそのものに命に与る時でもあります。このイエス様の命をいただくことが許されているがゆえに、私たちは神様の赦しの中に生きていることを実感することになるのです。御言葉も聖餐もそのことを私たちに知らしめるものであり、それ以前に、洗礼によって罪の赦しの中をすでに生きているのが私たちであるのです。そのことを日々確かめ、御国までの歩みを共に続けて参りましょう。祈ります。